

## 台湾、希少山猫に関心 その名は「石虎」、今や500匹

2014年7月31日05時00分

印刷 | メール | スクラップ

紙面ビューアー | 面一覧



石虎(シーフー)

「石虎(シーフー)」を守れ——。台湾で石虎と呼ばれる山猫が環境保護のシンボルになりつつある。かつて1万匹以上いるとされたが、今は絶滅危惧種だ。中部苗栗(ミアオリー)県では生息地を貫くバイパス道路計画が見直しに追い込まれた。希少さを町おこしにつなげる動きも出ている。



### ■生息地の道路計画見直し

「石虎は、標高が低い地域の環境の健全さをはかる重要な指標なのです」。27日、台北市立動物園でのイベントで、林務局の李桃生局長がこう訴えた。

動物園ではこの日、石虎の「集宝(チーパオ)」が一般公開された。石虎は1940年の調査では台湾に広く生息し、1万匹以上いるとされた。だが、工業化や都市化で激減し、今では500匹以下とされる。苗栗県、南投県など中部でしか生息が確認できていない。石虎は警戒心が強く、公開されているのは台湾でもここだけだ。

集宝は、けがをして保護されていた親猫から昨年3月に生まれた2匹のうちの1匹だ。ある程度育てた上で野生に戻そうとしたが、適応できずにまた保護された。動物園に来たのは、石虎のことを知ってもらうことで環境の大切さを感じてほしい、という関係者の願いからだ。

ニワトリなど家畜を食べてしまうこともあり、農家などに嫌われていた石虎だが、最近は大きな注目を集めている。

台北から車で約1時間半。彫刻が盛んで「木彫街」として知られる苗栗県三義郷(郷は町村に相当)にバイパスの建設が計画されている。だが、その計画に「待った」がかかった。予定地が石虎の生息地に当たるためだ。

バイパスは総工費52億台湾ドル(約177億円)を投じ、南北に走る幹線道路に並行し、幅20メートルの道路を8.5キロにわたって敷く計画。事業を進める交通部(交通省)公路総局や県などは、バイパスに車が流れれば道路の渋滞が緩和され、生活環境が改善すると見込む。

三義に隣接し、バイパスの起点となる銅羅郷は科学園區(サイエンスパーク)などの開発を進めている。謝其全(シエチーチュワン)郷長は「道路が整備されていなければ、地方は発展のしようがない。道路が出来れば投資意欲も高まる」と期待する。

これに対し、石虎に詳しい屏東(ピントン)科技大学野生動物保育研究所の裴家騏(ペイチアチー)教授らが建設反対の声を上げた。

県は石虎のために代替地として17ヘクタールを確保するとしているが、裴氏はバイパスで土地が分断され、広い範囲で石虎の生息が難しくなると指摘。バイパスが出来れば周辺開発も進み、1千ヘクタールが生息に適さない場所になる恐れがあるという。石虎の縄張りは食物の量などから1匹100~200ヘクタールの広さで、最大10匹が生息できる広さに当たる。

裴氏はこう指摘する。「野生動物は一定数より少なくなると数を維持するのが難しくなり、絶滅に至る。石虎はもはや一匹も減らしてはならない」

#### ■グッズ化、地域おこしも

石虎を守ろうという呼びかけは、ネットなどを通じて広がっている。環境影響評価 審査委員会が4月にバイパス計画の審査を行ったところ、3~4月に立法院(国会)を占拠した学生運動の直後だったこともあり、1千人ほどが委員会が開かれた環境保護署前に集まり、反対の声を上げた。

こうした声を受け、審査委は石虎の生態をめぐる資料が少なく、現行計画では保護できるか分からないとして、開発側に追加調査と対策を求めた。公路総局は計画自体を進める構えは崩していないが、1年半から2年かけて調査した上で保護策を検討するという。

「わずかな数の石虎のために開発ができないのは不合理」との声も残るが、15年前から推進されてきたバイパスの必要性そのものにも疑問が出ている。

近くには並行して走る高速道路もあり、12年には銅羅にインターチェンジが設けられた。有料とはいえ、従来の幹線道路を使わなくても地元住民が南北を往来できるようになった。裴教授は「地元住民の高速道路利用料を補助した方が安上がり」と話す。

バイパス設置の理由とされた渋滞も、通り沿いに2軒並ぶ有名な麵屋を訪れる客が駐車場所を探して起きるといふ。木彫街で家具店を営む徐佑次さんは「混むのは週末、しかも麵屋の前だけ。交通整理さえすればいい」と指摘する。

三義郷の徐文達(シュイウエンター)郷長も渋滞解消策は必要とした上で、計画見直しに一定の理解を示す。高速道路の土手をかさ上げして一般道路を造るというのも一手、と話す。「バイパスについての地元の賛否は半々。審査委の決定を機に、さまざまな意見を聞いて最善の結論を出したい」との立場だ。

地元では、石虎への理解を広げようとの取り組みも始まっている。木彫り体験センターを家族で営む彭妃玉さんは「苗栗は『忘れられた地域』。発展が遅れていたが、今は残された自然が貴重になっている」と指摘。作家の林斐文さんらとともに石虎グッズを試作し、地域おこしにつなげられないか探っている。

苗栗県自然生態学会の洪維鋒氏はこう話す。「これまで台湾は発展のためにさまざまなものを犠牲にしてきた。石虎のおかげで、これまで見過ごしてきたことに気づくことができた」(三義〈台湾中部〉＝ 鶉飼啓)

#### ◆ キーワード

<石虎(シーフー)> ベンガル ヤマネコの台湾産亜種。夜行性で肉食。大きさは普通の猫とほぼ同じ体長50センチ程度だが、通常は猫とは交配しない。呼び名の由来は、屋に見つけると石のように固まる、崖の上で活動するのを好むなど諸説あるが、はっきりしない。(写真は特有生物研究保育中心提供)